

氏 名： 岡島 規子
学位の種類：博士（看護学）
学位記番号：甲第 79 号
学位授与年月日：令和 3 年 3 月 20 日
学位授与の要件：学位規則第 15 条第 1 項該当
論文題目：臨地実習に向けて境界を横断する看護学生の学習活動に関する研究
学位審査委員： 主査 小松万喜子 教授
副査 片岡 純 教授
副査 服部 淳子 教授
副査 戸田由美子 教授
副査 大原 良子 教授

論文内容の要旨

I. 序論

看護学生(以下、学生)は、学内から臨地へ、また多様な臨地間を移動して実習を行い、この学習の場の横断が学生に困難をもたらすことが報告されている。Engeström et al. (1995)は活動理論において境界横断の概念を提唱し、異なる活動システム間の境界の横断により生じる矛盾を越えていく水平的学習は、学生に困難を与えるだけでなく、学習の拡張、発達に繋がるとする。本研究では、領域別実習における学生の学習活動に生じる矛盾と境界横断のプロセスを明らかにし、活動システムを移動する学習活動の様相を可視化し、学習活動の支援を検討した。

II. 研究目的

領域別実習における学習活動において学内から臨地、異なる臨地を移動する学生が捉える矛盾とその起因、実習時期による変化を、活動システムモデルを用いて明らかにする。また、矛盾を解決する学習活動のプロセスと学生の考え方や活動の変容を明らかにする。

III. 用語の定義

1. 活動システム：活動の構造及び文脈からなり、人間の集団的な活動をひとまとまりのシステムと捉えたもので、実習における学習活動を活動システムと捉える。活動システムは「主体」「対象(目的や動機)」「アーティファクト」「コミュニティ」「ルール」「分業」の構成要素をもつ。
2. 矛盾：異なる学習の場を移動する学習活動により問題状況として表出される活動システムの構成要素内、または、構成要素間の緊張関係。
3. 領域別実習：「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」（平成21年度改正）の「専門分野Ⅱ」の成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学実習。

IV. 研究方法

1. 研究参加者と調査時期

基礎看護学実習を修了し領域別実習(以下、実習)を履修する看護大学生32名。面接は実習履修が半分終了する期間と、半分過ぎてから実習終了後1か月までの期間に2回行った。

2. データ収集方法

個人背景を調査後、活動システム概念をもとに作成したインタビューガイドを用いて構成的面接を行った。面接内容は、「これまでと同じやり方では上手くいかなかった・困ったこと」「これまでと違う工夫や対応が必要であった経験」と対処、学習活動に影響した友人等との関わり、学習活動や考え方が変わったと思うこと等とした。初期(1つまたは2つの実習を終えた時期)、中期(初期と後期の間)、後期(最後の2つの実習を経験した時期)の各時期の体験に分けて調査した。

3. 分析方法

活動システム概念(図1)を用い、「主体」である学生が、「対象」に向う学習活動において、活動システムの構成要素の①アーティファクト、②ルール、③コミュニティ、④分業、の4つを媒介した活動(図2)を分析対象とした。

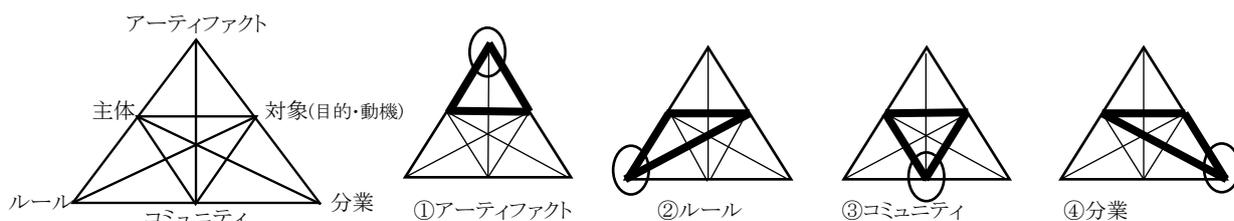


図1 人間の活動システムの構造

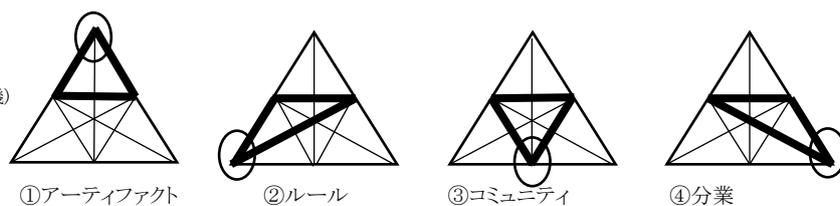


図2 本研究において分析対象とした活動(太線の三角)

逐語録から、矛盾と、矛盾を解決する学習活動のプロセス(以下、プロセス)、考え方や学習活動の変容に関する記述を抽出しコード化し、これを時期別にカテゴリー化した。次に、矛盾のカテゴリーを構成要素ごとに整理し、矛盾の特徴を見いだした。プロセスのカテゴリーは構成要素別、矛盾の特徴別に分類し、また、コードを時期別、構成要素別、矛盾の特徴別に整理して数と割合を算出し、傾向を分析した。研究参加者のメンバーチェックを受け、看護学教育専門家4名に分析結果に違和感がないことを確認し信用性を確保した。本研究は愛知県立大学研究倫理審査委員会の承認を受けた(29愛県大学情第6-22号)。

V. 結果

研究参加者は8大学の学生32名で、16名は所属大学敷地内に実習施設があった。以下、構成要素を「」、矛盾の特徴を【】、プロセスの種別を[]、変容は《》で示す。

1. 活動システムにおける矛盾の特徴

「アーティファクト」の矛盾の特徴は【異なる対象者への援助における矛盾】【対象者との関係形成における矛盾】【学習方法が異なることによる矛盾】【知識や技術の不足による矛盾】【使用物品が異なることによる矛盾】【情報収集で生じる矛盾】【事前情報・イメージによる矛盾】の7つであった。「ルール」は【ルールが異なることによる矛盾】【教員や指導者が替わることによる矛盾】【通学方法が変わる

ことによる矛盾】【実習ローテーションによる矛盾】の4つで、【実習ローテーションによる矛盾】は中期と後期でみられた。「コミュニティ」は【学習環境が変わることによって生じる矛盾】【新しい集団と関わり学習することによる矛盾】の2つであった。「分業」は【教員や指導者によりもたらされる矛盾】【看護師等に指導を受けることによる矛盾】【グループで協力して学習することによる矛盾】【カンファレンスで生じる矛盾】の4つで、【カンファレンスで生じる矛盾】は中期と後期でみられた。「アーティファクト」の矛盾のカテゴリー数が各期で多く、「ルール」は中期や後期でカテゴリー数が増え、「コミュニティ」や「分業」は後期に減少した。

2. 矛盾を解決するプロセスの種別

14種が抽出され、[自分で勉強したり考えながら取り組んだ][メンバーと相談・協力した][教員・指導者に相談したり支援を受けた]が多かった。初期と後期は[自分で勉強したり考えながら取り組んだ]、中期は[メンバーと相談・協力した]が多かった。構成要素別のプロセス総数では、「アーティファクト」の矛盾へのプロセスが最も多く、「アーティファクト」「ルール」では[教員・指導者に相談したり支援を受けた][自分で勉強したり考えながら取り組んだ]が多かった。「コミュニティ」は[自分で勉強したり考えながら取り組んだ]、「分業」は[メンバーと相談・協力した]が最も多く、教員・指導者への相談は少なかった。

3. 実習経験による学生の考え方及び学習活動の変容

学習活動に対する考え方の変容では、異なる場を体験することへの肯定的な捉え方や、《実習の学びは類似の経験によって積み重なっていったり、異なる経験から横に広がったりしていくと考えるようになった》等と学習成果を評価し自信も得ていた。学習活動の変容では、《患者の立場や異なる人の目線で考えることができるようになった》《場や看護師と関わることに慣れて、工夫して取り組み早く動けるようになった》等の自己の変容を捉えていた。グループ活動の変容では、《メンバーがお互いの患者や課題に関心を寄せて、調整・協力、情報共有ができるようになった》等の自他の変化を捉えていた。進路に対する考え方の変容では、実習での情報から進路を検討したり、《実習を経験する中で看護師を目指す気持ちが明確になったり強くなった》等がみられた。

VI. 考察

「アーティファクト」で多かった【異なる対象者への援助における矛盾】【対象者との関係形成における矛盾】は、学習の場を移動して本物の患者に出会い、また、常に前回の受持ち患者とは違うことによる“同じようにはいかない”という体験から生じていたと考える。実習で受け持つ対象者は実習目標を達成する特性をもつ人が選定され、学生は課題達成や評価に直結する矛盾を抱え、教員や指導者に支援を受ける一方で、自分で考えながら取り組み、学習や工夫を重ねて矛盾と対峙していることがうかがえる。このような矛盾への取り組みを経ることにより、学習の場や学習内容が異なっても共通する部分があり、経験が積み重ねられていくことを捉えたり、対象者の個別性や各場特有の違いに関する学びが横へ広がっていくことを捉えたりしていく。一方、「ルール」や「コミュニティ」における【ルールが異なることによる矛盾】等に対して、自分で考えたりメンバーに相談したり協力して対処するプロセスが多かったことは、実習場所のルールや学習環境を変えることは学生にはできず、従うしかない立場の中で、自分で考えたりメンバー同士で解決する方法を模索していたと考える。「分業」で全期に多くみ

られた【教員や指導者によりもたらされる矛盾】【グループで協力して学習することによる矛盾】等は他者との関わりによって引き起こされるものであり、学生の多くが初めて出会う他者との関わりに矛盾を抱えながら、同じ矛盾を共有するメンバーと相談・協力して取り組んでいることが確認された。メンバーの成長によるグループ活動の発展という変容がみられたことは、矛盾を乗り越えるメンバーとの協働の経験が、学生個々とグループの成長、グループ学習活動の習得に繋がっていると考える。

実習指導においては、学生が自分で解決する力を尊重しながら、学生が対象者との関わり等の何に矛盾を捉えているのか、支援が必要な矛盾か否かを対話から明確にし、矛盾を解決する取り組み方を捉えて支援する必要がある。「コミュニティ」や「分業」において学習の場へのアクセスの困難さから矛盾が生じている場合は、看護管理者や指導者と連携し、学習環境や指導体制を点検、調整する必要がある。

VII. 結論

1. 「アーティファクト」の矛盾は全期において【異なる対象者への援助における矛盾】等の7つがみられ、カテゴリー数が最も多かった。「ルール」の矛盾は全期で【ルールが異なることによる矛盾】等の3つがみられ、中期と後期は【実習ローテーションによる矛盾】が加わり、カテゴリー数は中期や後期に増えた。「コミュニティ」の矛盾は全期で【学習環境が変わることで生じる矛盾】等の2つがみられ、中期と後期に減った。「分業」の矛盾は、全期で【教員や指導者によりもたらされる矛盾】等の3つがみられ、中期と後期で【カンファレンスで生じる矛盾】が加わり、カテゴリー数は後期で減った。

2. 矛盾に対するプロセスは、「アーティファクト」や「ルール」の矛盾では、[教員・指導者に相談したり支援を受けた][自分で勉強したり考えながら取り組んだ]のプロセスが多く、「コミュニティ」では[自分で勉強したり考えながら取り組んだ]、「分業」では[メンバーと相談・協力した]が多かった。

3. 異なる場を移動しながら矛盾を解決する学習活動のプロセスを経て、学生は矛盾に対する考え方を変容させ、肯定的な捉え方や自信を得ていた。また、患者を中心に考えた学習活動へと自己の姿勢や行動を深化させていた。そして、メンバー相互の成長によりグループ活動を発展させ、さらに、複数の実践の場の移動により将来働く場を模索していた。

4. 教員や指導者は支援が必要な矛盾であるか否かを査定し、矛盾を解決する取り組み方を含めて学習活動を支援する必要がある。

論文審査結果の要旨

看護学生は臨地実習（以下、実習）において異なる場を移動しながら各実習科目の課題に取り組んでいく。先行研究では、学生が臨地実習において、コミュニケーション、物品利用の違い、実習に関わる時間や秩序などに困難を感じていることが報告されている。これらの困難は学習の阻害要因として捉えられがちであるが、活動理論では、複数の活動システムの境界を越える学習活動による水平的学習が個人や活動システムの発達につながり、また、文化歴史的基盤の異なる場の移動により生じた矛盾を解決しながら学習活動を行うことが学習成果の深化につながるとする。本研究の目的は、領域別実習において場を移動しながら学習活動をしていく学生が捉える矛盾とその変化を活動システムモデルを用いて明らかにすること、矛盾を解決する学習活動のプロセスと学生の変容を明らかにすること、これらから学習支援について検討することである。本研究では、Engeströmの活動理論を理論的基盤とし、実習の場を移動する学習活動を境界横断の視点から捉え、境界を横断する学習により学生が捉える矛盾と、矛盾を乗り越えるプロセスと成長を詳細に明らかにした点に独創性、新規性、発展性があると評価した。

本研究では、基礎看護学実習後に領域別実習を履修する看護大学生 32 名を対象として、実習の前半と後半に 2 回の構成的面接を行い、実習の初期、中期、後期の 3 つの時期の経験を聴取した。8 大学の実習計画に沿って面接を行い、32 名全員の 2 回の面接完了には 1 年を要した。教育機関の背景が異なる多数の学生への継続的面接により、研究目的に対して必要な豊富なデータを十分に収集できていると評価した。分析では、矛盾、矛盾を解決するプロセス、考え方や行動の変容に関する記述をコード化し、矛盾は時期別にカテゴリー化したのちに、活動を媒介する構成要素別（アーティファクト、ルール、コミュニティ、分業）に分類して特徴を抽出した。矛盾を解決するプロセスは、カテゴリー化したのちに、構成要素別、矛盾の特徴別に分類し、コード数と割合を算出して変化の傾向を分析した。考え方や行動の変容は意味内容の類似性からカテゴリー化した。この過程は丁寧に行われ、データを適切かつ論理的に分析できていると評価した。

矛盾の特徴は、「アーティファクト」を媒介する学習活動では、全期で、異なる対象者への援助における矛盾、対象者との関係形成における矛盾、使用物品が異なることによる矛盾、情報収集で生じる矛盾等の 7 つが抽出され、カテゴリー数は他の構成要素に比べて多かった。「ルール」は全期で、ルールが異なることによる矛盾、教員や指導者が替わることによる矛盾、通学方法が変わることによる矛盾がみられ、中期と後期には実習ローテーションによる矛盾が加わり、カテゴリー数が増えていた。「コミュニティ」では、学習環境が変わることによって生じる矛盾、異なる集団で学習することによる矛盾の 2 つがみられ、これらは中期・後期で少なかった。「分業」は全期で、教員や指導者によりもたらされる矛盾、看護師等に指導を受けることによる矛盾、グループで協力して学習することによる矛盾がみられ、中期と後期ではカンファレンスで生じる矛盾が加わり、カテゴリー数は減っていた。矛盾を解決するプロセスは 14 種が抽出され、自分で勉強したり考えながら取り組んだ、メンバーと相談・協力した、教員・指導者に相談したり支援を受けた、という対処がいずれの矛盾に対しても多くとられていた。「アーティファクト」や「ルール」の矛盾では、教員・指導者に相談したり支援を受けた、自分で勉強したり考えながら取り

組んだ、が多く、「コミュニティ」の矛盾では、自分で勉強したり考えながら取り組んだ、「分業」の矛盾では、メンバーと相談・協力したが多かった。学生は捉えた矛盾に対して、自分で努力して取り組むとともに、矛盾の特徴にあわせて学生の立場で対処可能なプロセスを選択して取り組んでいることが明らかになった。矛盾を乗り越える経験による学生の変容では、異なる場を体験することの肯定的な捉え方、実習の学びが類似の経験によって積み重なっていったり異なる経験から横に広がったりしていくという考え方の変容がみられ、学習成果を評価し自信も得ていた。また、患者の立場や異なる人の目線で考えることができるようになった、場や看護師との関わりに慣れて工夫して取り組めるようになった等の自己の変容を捉えていた。グループ活動ではメンバーがお互いの患者や課題に関心を寄せて調整・協力できるようになった等の自他の成長を捉え、進路に対する考え方においても看護師を目指す気持ちが強くなった等の変容がみられた。本研究は学生が実習という学習活動において経験する矛盾を詳細に記述し、特徴とその起因の構造を活動理論に基づく系統的なデータ収集と分析によって明確にした。また、矛盾の経験とそれを乗り越えるプロセスを辿ることにより、学生個々の実習課題の達成と成長に向かうとともに、チームで協働して活動する力を高めていくことを明らかにした。あわせて、場への強い緊張や馴染めなさ、教員等がもたらすルールやコミュニティの矛盾が効果的な学習活動を妨げる状況も捉えられ、教育の課題と対策も提示された。

以上より、本研究は先行研究が適切に活用され、研究目的に対して適切な研究方法が用いられ、必要なデータが適切かつ論理的に分析できていると判断した。また、本研究によって得られた結果はこれまでの研究では得られていない新しい知見であり、結果に基づく考察から看護教育への活用可能で有用な示唆が導かれており、独創性、新規性、発展性があると評価した。論文の形式も適切であると判断した。

最終試験では、実習における学びの深化に応じた教育を行うために必要なことは何か、本研究結果を踏まえて組織で準備必要なことはあるか、対象者の背景による矛盾の差異の有無、実習領域が異なることによる傾向の違い、活動理論に基づいて矛盾を捉えたことによる新知見は何か、プロセスと変容の特徴的な結果は何か、実習指導を行っている教員にどのように還元するかについて質問がなされ、研究成果を踏まえて適切に回答された。

副論文として提出された「基礎看護学実習における看護学生のアーティファクトに対する認知（日本看護学教育学会誌，24（1），1-14，2014）」と「活動理論を理論的背景とした国内先行研究における学習の場と活動理論の活用方法に関する文献検討（愛知県立大学看護学部紀要，24，11-21，2018）」の2篇は、十分に文献検討がなされ、研究目的に対して適切な研究デザインで、必要なデータ収集が行われ、分析方法も適切で、論旨も一貫していると評価した。

以上のことより、本学位審査委員会は、提出された本論文が愛知県立大学大学院看護学研究科博士後期課程の学位に関する内規第16条2項の審査基準を満たしており、看護学領域の論文として、実践・研究・教育の発展に寄与する学術上価値のある論文であり、論文提出者である岡島氏が看護専門領域における十分な学識と研究者としての能力を有することを確認したので、博士（看護学）の学位を授与するに値するものと全員一致で判断した。